

老人のテレビ・メッセージ受容過程

香 取 淳 子

(お茶の水女子大学・生活文化研究会)

一、はじめに

総理府統計局による昭和五八年一〇月一日の推計人口によれば、六五歳以上の老年人口は総人口の九・八%を占め(前年比、〇・二%増)、厚生省人口問題研究所の予測を上まわる勢いで高齢化が進行しているという。本稿では、そのような人口動態の特性を念頭におき、高齢化社会におけるテレビの機能を予測することを目的に、自己概念を手がかりとして老人のテレビ・メッセージ受容過程を明らかにしたい。

さて、老いてなお、自由潤達、種々の活動にいそむ人がいるかと思えば、外出もままならず、日常生活にも不自由をかこつ人がいる。精神的、身体的老化の度合に個人差はいちじるしく、暦年齢で画一的に論じることのできないのが老年期の特徴である。とはいえ、個々の老人の一生を縦断的に眺めれば、壮

年期より心身の機能が低下し、種々の役割喪失を経験することが多くなるという点では、誰しもほぼ一様のプロセスをたどる。心身の衰弱が進行するばかりでなく、社会的なかわりが減少していくなかで、老人は、大なり小なり不安感や無力感にさいなまれがちになる。身体感覚、社会的な評価と密接なかわりをもつ自己概念にも、おのづと動揺が生じやすい。したがって、老人は、老人であるが故にもたらされた身体的、精神的、社会的状況にあらたに適應し、受容していくことで、安定した自己概念の形成を図らなければならない。すなわち、主だった役割の喪失、心身の老衰を契機に、新しい役割のなかにアイデンティティを確立したり、あるいは老いを受容したりしていかなければならないのである。兼子(一九六六)によれば、向老期から老年期にかけては、自己概念の再編成過程であり、一般的に、

長く苦しい葛藤が随伴するという。⁽¹⁾

ところで、身体的、精神的老化、社会的位置づけの不安定さは、以下の点で老年期の特殊性を生む。

まず、心身が老化していくに伴い、相応の気力、体力の必要とされる対人コミュニケーションをはじめ、諸活動にも徐々に制限が加えられていく。当然のことながらコミュニケーション・チャンネルは減少し、なかば孤立状態に陥った多くの老人は、いながらにして享受できるマス・メディアからのメッセージに身を晒しがちになる。マス・メディアの中でもとくに、テレビに親しむ傾向にあることは各種調査から明らかにされており、⁽²⁾ テレビが老人の自己概念形成に無視できない役割を果たしていることが推測される。

Epstein (一九七三) は、自己概念についての諸説をレビューした後、人は重要な他者との相互作用を通して自己概念を発達させること、経験に応じて変化するダイナミックな組織体である自己概念は摂取する情報量が増加するにつれ、それに同調する傾向をみせること、⁽³⁾ 等々を導き出した。老人がマス・メディアの中でもとくにテレビに依存する傾向をみせ、⁽⁴⁾ テレビに対人コミュニケーションの代替機能をもたせる傾向にあることを思えば、老人が肯定的な自己概念を獲得し、幸福感を維持しているためには、対人コミュニケーションが重要であることはもちろん、テレビ・メッセージからの影響も看過できないのである。

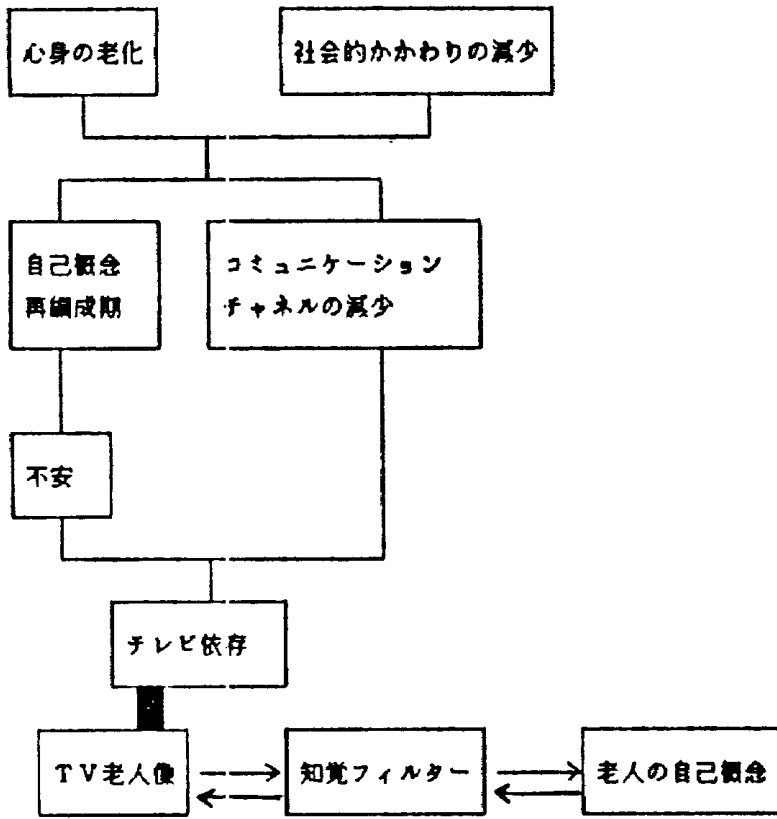
Gerbner ら (一九八〇) は、テレビはイメージの拡散器だ

といい、テレビを通して送られる老齡についてのイメージが加齢や年齡役割についての概念を培養するという。この教化分析 (Cultivation-Analysis) から、とくに直接的情報のない場合、

人はテレビ・メッセージに左右されやすい、等の知見を見出している。⁽⁵⁾ その後、JTB (一九八二) は米中の学生をサンプルに調査を実施した結果、長時間視聴者はテレビで強調されている内容に同調する傾向を示すことを確認している。⁽⁶⁾ また、竹下 (一九八三) は、和歌山市での調査結果から、新聞ほど顕著な傾向はみられないとしながらも、テレビ・ニュースへの接触量の多い人や、他者と政治談義を行う機会の少ない人ほど、議題設定効果のみられたことを報告している。テレビ・メッセージへの接触量の多いこと、直接体験、直接情報に触れる機会の少ない場合にテレビ・メッセージの影響を受けやすいという、Gerbner らの知見を支持する結果が、日本でも政治的コミュニケーションの場においてみられたのである。⁽⁷⁾ すなわち、テレビ・メッセージは、どの人にも一様に作用するのではなく、量的 (接触量) にも、質的 (情報チャネル) にもテレビに依存しがちな人に、影響力が大きいといえる。

したがって、この観点からいえば、視聴量が多く、しかも、テレビに対人コミュニケーションの代替機能をもたせがちな老人視聴者は、テレビ・メッセージの影響を受けることが多いと仮定できる。

ところで、身体的老化はメッセージの受容器である感覚器官



(図1)

の老化をも伴う。荒井(一九七二)は、知覚は、感覚器官とは一対一の対応はせず、知能に依存するため、老人の知覚現象を実験的に研究するのはかなり困難だとしながらも、視覚、聴覚ともに年齢を重ねるにつれ、機能低下をおこし、錯覚量が増加することを報告している。⁽⁸⁾老人が自分を取り巻く環境からなんらかの情報を摂取する際、このような知覚特性によるメッセージ歪曲の可能性のあることを忘れるわけにはいかない。もちろん、老人のテレビ・メッセージ受容過程から知覚の働きを排除するわけにはいかない。メッセージ内容は受け手の知覚を通してはじめて、メッセージとしての意味をもつようになるのである。

Forgas(一九六六)は、人からなんらかの対応行動を引き出すような刺激だけを情報と呼ぶことができるといい、知覚は、そのような情報抽出の過程だと定義する。⁽⁹⁾また、Neisser(一九七六)は、選択的注視実験(Neisser & Becklen, 1975)の結果から、「注視している出来事のみが、予期、探索、情報抽出のサイクルの中に繰り込まれる」ことを見出した。同様のことが選択的聴取についてもいえる(Cherry, 1953)とし、「注意とは知覚そのものである」と結論づける。⁽¹⁰⁾メッセージ受容過程において、知覚の果たす役割の重要性を確認しているのである。さらに、このような、メッセージの受け手の側の主体性については、感覚神経生理学の最近の研究からも裏付けられていることを補足する。⁽¹¹⁾

したがって、老人のテレビ・メッセージ受容過程を詳細に把握するためには、メディアからのメッセージ内容と受け手との直接的な関係ばかりでなく、この両者を媒介するものとして知覚の働きをも考慮に入れる必要がある。そこで、「テレビに登場する老人像」⇄「知覚フィルター」(テレビに登場する老人をどのように知覚するか)⇄「老人の自己概念」という図式を想定し、この三者関係を明らかにすることから、老人に対するテレビの影響力、老人の情報行動をみることにした。老年期に特有の自己概念再編成過程にあつて、テレビ・メッセージが老人にどのように作用しているか、あるいは、老人はどのようなメッセージを受容する傾向にあるのかを把握しようと試みたのである(図1)。

二、調査の概要

一九八四年三月三〇日から四月九日にかけて、世田谷区在住の六五歳以上の老人を対象に、層化二段階方式で無作為に八〇〇サンプルを抽出し、個別面接法で調査を実施した結果、六五歳から九四歳(平均年齢七三・三歳)までの六三五票の有効回答を得た(回収率七九・三%)。男子二八九名(四五・五%)、女子三四六名(五四・五%)が本研究の分析対象者である。

さて、本研究での重要な変数である自己概念、テレビに登場する老人、知覚フィルター、等について説明しておかなければならない。

まず、自己概念について。これは Combs & Snygg の

現象学的自己理論の立場にたち、「知覚体験から生みだされたさまざまな自己像の中でも、とくに中心的なものの体制化されたもの」と規定する。¹² 各種のモラル・スケール¹³を参考に、老人の安定した自己概念獲得のための重要な要因を考慮したうえで、活動性、連帯性、不安感、充実感、等の側面から測定できるように試みた。

つぎに、テレビに登場する老人像について。これには、安定した自己概念獲得のための要因ばかりでなく、ドラマやニュースなど、視聴する番組特性を考慮し、社会的逸脱性、活動性、地位、積極性、社会的有用感、等の側面から測定できるように配慮した。

最後に、知覚フィルターについては、それぞれ男女別に、「老人が十分にテレビに登場しているか」、「テレビに登場する老人は、現実の姿に近いか」、「テレビでは老人は好意的に扱われているか」等々の質問項目を設定した。同一視の対象である老人を目にする機会が多ければ、学習効果が促進され、メッセージが老人の自己概念に影響する、と仮定したのである。これと同様に、現実像に近いかな否か、あるいは、好意的に描かれているかな否か、等も学習効果に関連してくると思われる。さらに、老人は老人であるというだけではテレビの登場人物を同一視の対象とはしないかもしれない。そこで、以上の質問項目をそれぞれ男女別に設定し、合計六つの質問項目を知覚フィルターとした。

表1 知覚フィルター（男子・現実的）別自己概念・TV老人像

自己概念	否 定 的		ふ つ う *		肯 定 的 *	
	肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定
TV 老人像	知覚フィルター TVに登場する男子老人は現実の姿に近い					
	肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定
否 定 的	17	21	8	27	11	24
ふ つ う	27	33	22	32	20	30
肯 定 的	33	39	23	22	31	23
Sig.	0.9924		0.0364		0.0394	

(注) *…… χ^2 検定の結果 $P < 0.05$ で有意差
 なお、DK, NA は欠損値として処理したため、上記クロス表の合計は、いずれも 635 に満たない

三、調査の結果

(a) 知覚フィルター

まず、老人がテレビに登場する老人を知覚する際、基本的属性である性別の影響を受けているかどうかをみるために、性別でクロス集計してみたが、有意差はみられなかった。そこで、自己概念を媒介に三重クロス集計してみると、男子老人で、否定的自己概念を持つ者ほど、テレビには男子老人が十分に登場すると知覚する傾向がみられた ($P < 0.05$) のに対し、女子老人は、否定的自己概念を持つ者ほど、テレビには女子老人が十分に登場するとは思わない傾向がみられた ($P < 0.05$)。否定的自己概念を持つという点では同等の立場にありながら、テレビ・老人像を量的に知覚する際、反対の傾向をみせるのである。もともと、テレビには女子老人が十分に登場するとは思わない老人は、否定的自己概念を持つ者ほど娯楽番組をよく見る傾向にあること ($P < 0.05$) から、この量的知覚にみられる性差は、テレビ・老人の出現頻度に対する期待度による差異というより、よく見る番組のちがいを反映していると考えられる。男子老人は報道番組をよく見る傾向がみられた ($P < 0.001$) のに対し、女子老人は娯楽番組をよく見る傾向がみられた ($P < 0.0005$) のである。

(b) テレビ・メッセージ受容過程

それでは、老人はテレビ・メッセージから、自己概念になんらかの影響を受けているのだろうか。それを解明するために、

表 2 知覚フィルター（女子・現実的）別自己概念・TV 老人像

自己概念		否 定 的				ふ つ う *		肯 定 的 *	
TV 老人像	知覚フィルター	TVに登場する女子老人は現実の姿に近い							
		肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定		
否 定 的		16	22	9	26	10	25		
ふ つ う		29	33	27	26	21	30		
肯 定 的		36	35	26	19	32	23		
Sig.		0.6880		0.0123		0.0185			

(注) χ^2 検定の結果 *…… $P>0.05$ で有意差. DK, NA は欠損値として処理したため, 上記クロス表の合計は 635 に満たない

まず、「テレビに登場する老人像」と「老人の自己概念」とのクロス集計結果を検定してみたが、有意差はみられなかった。この結果からみる限り、「テレビ・老人像」が老人の自己概念に影響を与えているわけではなく、また、老人は、自分の自己概念に協和したテレビ・メッセージを受容しているわけでもないことが明らかにになった。当初の予測に反し、集合的にみれば、「テレビ・老人像」は老人の自己概念とはなんら関係のないことが示されたのである。

そこで次に、知覚フィルターを媒介にして、「テレビに登場する老人像」⇄「知覚フィルター」⇄「老人の自己概念」、この三者関係を三重クロス集計し、結果を検定してみると、

(A1) 肯定的自己概念を持つ者および、ふつうの自己概念を持つ者は、テレビに登場する老人（男子であれ、女子であれ）が、現実像に近いと思うほど、テレビに描かれた老人を肯定的だと認知する傾向がみられた（「老人の自己概念」⇄「知覚フィルター」⇄「テレビに登場する老人像」）（表1、表2）。予測に反し、逆（「テレビに登場する老人像」⇄「知覚フィルター」⇄「老人の自己概念」）は成立しなかった。

この結果からは、以下の命題を引き出すことができる。

- (a) 老人は、テレビに登場する老人が現実に近いという知覚のフィルターを通した時、自己概念に協和するテレビ・メッセージを受容しやすい。
- (b) 老人は、テレビに登場する老人が現実像に近いという知

表 3 知覚フィルター（男子・好意的）別自己概念・TV 老人像

自己概念		否 定 的 **	ふ つ う *	肯 定 的 ***			
TV 老人像	知覚フィルター	TVに登場する男子老人は好意的に扱われている					
		肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定
否 定 的		7	25	9	23	12	22
ふ つ う		30	28	26	18	25	21
肯 定 的		44	28	26	15	42	12
Sig.		0.0010		0.0057		0.0003	

(注) χ^2 検定の結果, *..... $P<0.01$, **..... $P<0.005$, ***..... $P<0.0005$, では有意差. DK, NA は欠損値として処理したため, 上記クロス表の合計 635 に満たない

覚のフィルターを通した時、肯定的自己概念を保持できるようなテレビ・メッセージを受容しやすい。

ところで、否定的自己概念を持つ者には、テレビに登場する老人が現実像に近いという知覚のフィルターを通して、否定的老人像を認知する傾向（命題（a））も、肯定的老人像を認知する傾向（命題（b））もみられなかった。

したがって、老人は、テレビに登場する老人が現実像に近いという知覚のフィルターを通した時、肯定的自己概念を保持できるようなメッセージを受容する傾向がみられるが、その際、メッセージが、自己概念との認知的不協和の度合がはなはだしい場合は受容されない（A1）、と仮定できる。

（A2）どのような自己概念を持つとも、テレビに登場する老人（男子であれ、女子であれ）が好意的に扱われていると知覚するほど、肯定的な老人像を認知する傾向がみられた（表3、表4）。ところが、この場合も、逆は成り立たなかった。

このことから、自己概念との認知的協和の度合を問わず、老人は、テレビに登場する老人が好意的に扱われていると知覚した時、肯定的自己概念を保持できるようなメッセージを受容する（Aロ）、と仮定できる。

以上の結果から、知覚フィルターを媒介に、老人のテレビ・メッセージ受容過程をみると、次のように、まとめられる。

(1) 老人は、テレビ・メッセージから影響を受けるのではなく、主体的にメッセージを選択し、受容していくが、その際、

表 4 知覚フィルター（女子・好意的）別自己概念・TV 老人像

自己概念		否 定 的 *		ふ つ う **		肯 定 的 ***	
TV 老人像	知覚フィルター	TVに登場する女子老人は好意的に扱われている					
		肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定
否 定 的		10	22	7	25	5	29
ふ つ う		31	28	24	20	23	23
肯 定 的		47	25	27	17	38	16
Sig.		0.0055		0.0018		0.0000	

(注) χ^2 検定の結果 *…… $P<0.01$, **…… $P<0.005$, ***…… $P<0.0001$ で有意差。DK, NA は欠損値として処理したため、上記クロス表の合計は 635 に満たない。

自己概念のあり方がおおいに影響する。

(2) 老人は「現実像に近い」という知覚フィルター、「好意的に扱われている」という知覚フィルターを通した時、メッセージを受容しやすい。

(3) 老人は、肯定的な自己概念を保持できるようなメッセージを受容しやすい。

このように、自己概念を手がかりに、老人のテレビ・メッセージ受容過程を検証してみたが、予測に反し、テレビ・老人像が老人の自己概念に影響するという傾向は発見できなかった。老人はテレビに親しむ傾向にあるとはいいながら、メディアを紹介しての間接的なコミュニケーションでは、自己認識の変容までには至らないことが明らかになったのである。テレビによるメッセージ効果が発見できなかったという知見は、接触量についての集計結果からも証明されている。

たとえば、視聴時間を媒介に「テレビに登場する老人像」と「老人の自己概念」との三者関係を検定しても、有意差は発見できなかったという事実を、補強材料にすることができる。視聴時間が長く、テレビが提供する老人像に多く接触していても、自己概念には影響がなかったのである。このことは、「テレビには老人が十分に登場する」という知覚フィルターが老人のメッセージ受容過程でなら影響力を持っていなかったことも関連する。接触量が多ければ、学習効果が促進され、テレビ・メッセージが老人の自己概念に作用する、という当初の仮説を

否定しないわけにはいかないのである。

自己概念再編成過程にあり、不安感、不全感が強く、Hovav、⁴⁴⁾ DL (一九五三) らのいう被説得性が強く、メッセージに左右されやすい状況にあるとはいえ、自身の存在にかかわる領域では、テレビ・メッセージは重要な影響力を持たないといえる。たとえテレビ・老人像に数多く接触したとしても、映像を通しての間接的経験、フィードバックの許されないコミュニケーション、メッセージ受容だけでは、自己概念を変容させるほどの強力な影響力を持ちえないのである。

自己概念はメッセージの影響を受けるのではなく、メッセージの選択、受容の場において威力を発揮する。すなわち、老人は、快く、しかも、自己概念とは認知的に協和するメッセージを受容しがちであることが明らかになった。

四、おわりに

それでは、最後に、老人視聴者の受容過程で明らかになった先述の結果は、従来の研究成果とどのように関連しているかを概観してみたい。

まず、たとえ接触量が多くても、老人視聴者には累積的なメッセージ効果がみられなかったこと。この点については、本調査の結果は、Gerbner らの教化分析から得られた知見を支持する結果にはならなかったが、必ずしも全面的に否定するものでもない。

たとえば、Gerbner らは、テレビは老人についての否定的な

イメージを培養すると報告しているが、とくに、老人と接触することがほとんどなく、直接的情報がない若年層に、その傾向が著しいとしている。その際、テレビとともに成長してきた若年層はテレビ・メッセージに感応しやすいことをも補足している。⁴⁵⁾ このような記述は、マス・コミュニケーションは既存の態度を変容させるより新しい態度を生成する方が容易であるという、Klapper (一九六〇) の指摘を支持する結果になっているばかりでなく、メディアに対する信頼感、親近感、あるいは感応性等がメッセージ効果を促進することを示唆している。この側面からみると、対象を六五歳以上に限ったことが、本調査でメッセージ効果が発見できなかったことに関連してくるとも考えられる。

すなわち、メディアによるメッセージ効果を考える場合、受け手が開放的であるかどうか(メディアに対する信頼感、親近感、あるいは感応性)、効果の及ぶ領域が受け手自身で検証可能な領域であるかどうか等によって、差異が生じてくると思われるのである。

たとえば、老年期の心理的特徴の一つとされる主観化傾向の増大が、受け手の開放性を阻んでいるかもしれない。一般に、老人は外界に対して閉鎖的で、自分の中に閉じ籠り、内省的になりがちだといわれている。マス・メディア接触が高いにもかかわらず、自己像という領域でメッセージ効果が発見されないのは、自ら日常的に検証可能領域であるばかりでなく、一つに

は、このような老人の内省化傾向に帰着させることができるかもしれないのである。

また、以上のことは、本調査の結果が、「社会的不全感が強い場合、被説得性が増大する」という、実験研究から導かれた Janis の知見を支持しないことにも関連してくるものと思われる。老年期に特有の身体的、精神的、社会的特性は、たしかに量的にも質的にはテレビ依存傾向を生みだしているが、それが、従来の知見どおりにメッセージ効果に連結していかないのが、老人視聴者の一つの特性といえよう。

ところで、本調査からはメッセージ効果は発見できなかったが、受容過程で明らかになった事柄がいくつかある。

まず、「現実に近い」という知覚フィルター、「好意的に扱われている」という知覚フィルターを通した時、メッセージは受容されやすいこと。これについては、「現実に近い」と知覚することが、モデリングのメカニズムを通して視聴者に影響を与えるとする、Atkin (一九八三) の指摘を援用することができ。Atkin は、「現実に近い」ということには、二つの側面がある、という。一つは、描かれる現象や登場人物が現実世界に存在する (perceived actuality) という側面であり、他方は、描かれる内容がたとえ虚構のことであってもその文脈が現実世界の現象に近い (perceived similarity) という側面であると断ったうえで、現実的なメッセージの提示が、視聴者の注意を引き、関与を呼びおこし、同一視を生みだすことを指摘する。¹⁸

「現実に近い」と知覚することは、情動的覚醒をうみ、メッセージの受容、さらには態度変容を促進させると推定されるのである。また、「好意的に扱われている」と知覚することがメッセージ受容を促進することについては、「人々は自己の先有傾向にとって好ましいか、同質のコミュニケーションに接触する傾向がある」とする Berelson の指摘を支持する結果になったといえる。¹⁹

つぎに、老人は肯定的自己概念を保持できるようなメッセージを受容しやすい傾向があること。これについては、伊藤(一九七二)による情報の選択接触に関する研究のレビューが参考になる。「人は肯定的な自己概念を保持しようとし、そのような目的に役立つような情報に接触しようとする」という、対人コミュニケーションの場で得られた Allen の研究成果を敷衍する結果となった。分析対象者の社会的状況、コミュニケーション形態のちがいが、あるいは調査方法のちがいが、等を越えて、同様の知見が得られたのである。また、自己概念とは認知的に協和しなくても、肯定的自己概念を保持できるようなメッセージを受容する傾向がみられること。これについては、「役に立つ情報であれば、認知構造とは不協和な情報でも接触しようとする」という Cannon らの知見を間接的に支持する結果となったといえる。効用や有用性が情報の選択接触に作用するという観点である。²⁰

従来、人の認知構造はかなり安定し、一貫性を持った情報処

理機構だといわれているが、老化とともにそれも変化する傾向にあることを思えば、老人サンプルでも成立したことは、これらの知見が人間の情報接触行動においてかなり普遍性を持つこととの証左に他ならない。

このように、上記の結果は、老人が肯定的な自己概念を保持できるようなメッセージを受容する傾向にあることを強調する。これは、「役割喪失、役割移行に伴うストレスに対処するには、老人が肯定的な自己イメージを獲得し、情緒的安定の基盤を形成できるような援助システムが必要である」とする Kahn と Antonucci (一九八二) の指摘を側面から支持するものである。すなわち、パーソナル・ネットワークだけでは得られない、あるいは不十分な、情緒安定の基盤を求めて、大部分の老人はテレビに接触し、肯定的メッセージを受容すると考えられるのである。したがって、高齢化社会におけるテレビの寄与ということになれば、なによりもまず、現実的な設定のもとに肯定的な老人像の提示をめざす、ということになるだろうか。

(付記) 本稿は、昭和五九年度日本新聞学会秋季大会での発表を部分的にまとめたものである。なお、調査データは、昭和五八年度放送文化基金前期助成を得て、老人視聴者の利用満足研究会によって実施されたものの一部份である。

(注)

(1) 荒井保男は、老人は、向老兆候を意識しても、自我はで

きるだけ抵抗しようとするといいい、自我の再編成を行い、現実に対応していかなければならないことを指摘する。さらに、兼子宙(一九六六)を援用しながら、向老への自我再編成過程は自我葛藤を伴うことをも指摘する(「老人の心理」、新福尚武、金子仁郎、『老人の精神医学と心理学』、一九七二、垣内出版、九頁)。

(2) 『老人生活実態調査報告書』東京都福祉局総務部調査課、一九八〇、九二頁、および、『昭和五九年九月国民世論調査—日本人の意識—一九八三—、結果表(付、一九七三年、一九七八年調査結果)』、NHK世論調査所、一九八三、三〇九頁

(3) Epstein のレビューは詳細にわたっているが、ここでは省略して記述。Epstein, S., The Self-Concept Revisited, *American Psychologist*, 1973, May, pp. 404~416.
 (4) 香取淳子、「老人のコミュニケーション・システム」、『ソシオロジ』九一、一九八四、九。九〇—一〇三頁。
 (5) Gerbner, G. et al., Aging with Television: Images on Television Drama and Conceptions of Social Reality, *Journal of Communication*, 1980, winter, pp. 37~47。

(6) Tan, A.S., Television Use and Social Stereotypes, *Journalism Quarterly*, 1982, spring, pp. 119~122。
 (7) 竹下俊郎、メディア論議設定仮説の実証的検討、『東京大学新聞研究所紀要』三十一号一九八三、一二九—一三〇頁。

(8) 荒井保男、「老人の心理」、前掲書、一三—二二頁

(9) Forgas, R.H., Perception, McGraw-Hill Inc., 1966, p. 1

(10) Neisser, U., Cognition and Reality, W.H. Freeman,

- 1976, 古崎敬・村瀬夏共訳『認知の構図』、サイエンス社、一九七八、八三〜八五頁
- (11) Neisser, 前掲書、九一〜九二頁
- (12) 我妻栄、『自我の社会心理』、誠信書房、一九六四、三〇〜三五頁
- (13) 前田大作らは、Kutner のモラールスケール、PGC モラールスケール、Neugarten らの生活満足度尺度(通称 LSI-A)等を用いて、日本の老人の主観的満足感の測定を試みている(「老人の主観的幸福感の研究」、『社会老年学』No. 11, 1979, pp. 15〜30頁)。また、和田修一は、Neugarten の LSI と同じく、Wood らが、Adams の追試結果を検討しながら、日本における LSI の追試を実施している(「人生満足尺度の分析」、『社会老年学』No. 14, 1981, pp. 21〜35。
- (14) Hovland, C.I., et al., *Communication and Persuasion*, Yale University Press, 1953, 辻正三、今井省吾訳、『コミュニケーションと説得』、誠信書房、一九七〇、一九五〜二二二頁
- (15) Gerbner et al., *ibid.*, p. 46
- (16) Klapper, J.T., *The Effect of Mass Communication*, The Free Press, 1960, NHK 放送学研究室訳、『マス・コミュニケーションの効果』、日本放送出版協会、一九六六、八三〜八七頁
- (17) Hovand et al., 前掲書、一九九頁
- (18) Atkin, C., *Effects of Realistic TV Violence vs. Fictional Violence on Aggression*, *Journalism Quarterly*, pp. 615〜616.
- (19) 田崎篤郎、「マス・コミュニケーションの受け手」、竹内郁郎、児島和人編、『現代マス・コミュニケーション論』、有斐閣、一九八二、二〇三〜二〇四頁
- (20) 伊藤陽一、「情報への選択的接触」、『コミュニケーション行動の理論』慶応通信、一九七二、二〇三〜二一五頁
- (21) Goldstein K.M., Blackman, S., *Cognitive Style*, John Wiley & Sons, Inc., 1978, 島津一夫、水口禮治訳、『認知スタイル』、誠信書房、一九八二、八〜九頁
- (22) Goldstein et al., 前掲書、二〜六頁
- (23) Kahn, R.L., Antonucci, T.C., *Convoys of Social Support: A Life-Course Approach*, Kiesler, S.B. et al. (ed.): *Aging: Social Change*, Academic Press, 1981, pp. 383〜403.